〈巻　頭　言〉

新しいジャンプ台
——「公衆衛生研究」への期待——

髙石　昌弘

いつの時代にも，また，どんな分野でも，「変革の時期」とか，「転換の時機」という表現は，比較的簡単な意味で扱われることが多いように思う．何ごとも時の流れとともにダイナミックに動いているはずであり，仮に定着したと思われる事象も，視点を変えてみれば，実は大きな変化があったということは決して稀ではないからである．しかし，昭和から平成に変わって以来の内外情勢の変化はどうであろう。本当に「変革の時期」といってよい程の変わり様ではなかろうか．

公衆衛生があるいは公衆衛生院が直面している課題も例外ではない．本院にしぼって考えてみると，地方移転問題や組織再編成問題など，創立以来53年の歴史のなかで，かつて経験しなかったほどの大きな課題と取り組みながら，職員一同が努力を重ね，飛躍を求めて新しい方向を模索しているわけである．

このような折，本誌“Bulletin of the Institute of Public Health”の和文誌名が「公衆衛生院研究報告」から「公衆衛生研究」に変更された．40巻1号という節目の飛躍である．なぜ，いま，「公衆衛生研究」なのか．編集委員会を始め，院内の公開討論会などで確認された最も重要なポイントは，公衆衛生分野における学術研究誌という性格を保ちながらも，公衆衛生活動の現場からの課題や問題点をとりあげ，これらを分析する場にしたいという編集方針であろう．

公衆衛生学が，Winslowの有名な定義を今さらもち出すまでもなく，“Science and Art”であり，しかも，それは“organized community effort”を通じて行われるべき実践の分野であることを再認識したこととして，この編集方針に筆者は大きな関心をよせていた．

平成元（1989）年度の本院長期課程（研究課程，専門課程，専攻課程）の入学式の際，院長としての挨拶のなかで，筆者は次のようなことに触れたことを思い出す．——「公衆衛生院には16の研究部があり，いろいろな職種の研究者が，それぞれ専門分野の教育研究を進めています．そして，各部の職員が互いに連携を保ちながら，公衆衛生技術者として活躍している皆さんと，そして，これから活躍しようとする皆さんと一緒に仕事をしようとしています．公衆衛生学はpracticalな，そしてmultidisciplinaryな分野ですから実践活動との結びつき，そして多職種間の連携が大切です．今年（1989年）のWHOのスローガンは“Let's talk health!”というものです．これをもじったわけではありませんが，皆さんは，ぜひ，この1年間に“Let's talk public health!”公衆衛生学のあり方について大いに話し合って下さい．」——

丁度，この年，いわゆるニュー保健所構想の名のもとに論じられた「地域保健将来構想報告書」が公表されたことは記憶に新しい．公衆衛生研究は，まさに保健所を始めとした公衆衛生活動の実践を基盤として新しい飛躍が望まれている．新しい誌名に変わった本誌の第1号で，「保健所はいま」という特集が組まれたことは大きな意義を持っている．

振り返って，「公衆衛生院研究報告」の創刊の序をみると，当時の古屋芳雄院長は，「……略……，関係方面，特に保健所等に配布し，技術行政の科学的基礎に培いたい」と述べておられる．しかし，必ずしもこのとおりの運営が難しかったこともあり，この点についての反省が今回の編集方針の論

議の引き金になったともいえよう．

超高齢化社会の到来，地球規模で論じられている環境保健問題など，多くの公衆衛生の課題に対応すべきヘルスマンパワーの確保が重視されており，その教育訓練は本院が担うべき重大責務である．公衆衛生の教育研究を進めるうえの新しいジャンプ台として「公衆衛生研究」が，飛躍のための大きな役割を果せるよう，心から期待をよせている．